歴史地理学　39－3　184　25～38　1997.6

朝鮮(李朝)時代末期郡縣図の表現方法にみる風水地理的地形認識

渋　谷　鎮　明

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．郡縣図の特性と邑の空間構成
(1)　郡縣図の作成時期とその特性
(2)　邑集落の構成要素
Ⅲ．郡縣図の描写にみる風水地理的認識
(1)　「脈のつながり」
(2)　「相々環抱」
(3)　郡縣図中に記入された風水用語
Ⅳ．むすび

Ⅰ．はじめに

現在，日本で一般的に「風水」という言葉で連想されるものは，家相とほぼ同義とおもわれる方位による吉凶判断や平安京の造営の際に用いられた玄武・青龍・白虎・朱雀といった用語である。これらのことは東アジア全体での風水という枠組みで捉えるときわめて一面的である。というのは，風水の二つの流派，すなわち方位を陰陽五行説に変換して吉凶を判断する「理法」と，気が山の中や水の中を流れるとの認識から，地表面に表れる地形・地勢を直観的に判断し，その吉凶を判断する「形法」が存在するということを考えると，上記の認識はほとんど理法の範疇に入るためである。またそのために日本では理法に対する形法の考え方が等閑視されている[1]。

朝鮮半島の風水地理説は，上記のように考えると非常に形法が強く表現されたものである。もちろん理法と形法の両者は影響しあい，単純には類別できない状態であるものの，たとえば朝鮮風水の基本的な原典である『錦囊経』や『青烏経』などは，気と地勢の判断法に関する記述がほとんどである。このように，形法の色濃く表れる朝鮮風水は，国土や地域の地形環境を把握する方法としての側面を持つがゆえに，より現代の地理学と通じる側面を持つと考えられる。

風水地理説の知識が広まったとされる朝鮮（李朝）時代の，特に後期から末期にかけては，風水的な認識方法をもって地形を認識することは広く行われ，これは一部現代にまで引き継がれている。すなわち地勢判断に基づいて建築物や墓地の立地を選定するという特性を持っているために，立地選定のみならず，地形を中心とした地理的な情報を体系化する役割を風水が担っていたのである。このような傾向は，朝鮮時代末期の地誌などには特に典型的に表れる。これらのことは朝鮮風水のみならず，東アジア全体の風水の形法的な特性をよく反映したものである。

筆者は，前稿において李朝末期の地理誌や朝鮮全土を描く古地図に，そのような風水的な地形認識方法があり，それによって地理的な情報が体系づけられていたこと，またこのような研究が韓国の地理学分野においても行われつつあることを指摘した[2]。風水書以外の歴史的資料に風水的な表現・用語が用いられたり，地形の描写に風水的な地形の認識が用いられていることを利用して，風水地理説に

ついて言及しようとする試みは，中国の方誌を利用した堀込の先駆的な研究などで行われてきている[3]。このような方法をとることによって，資料が作成された時期の風水知識の広がりとその特性や，当時の自然観，とくに地形を中心とする自然環境の見かたを明らかにすることができるであろう。

ところで，筆者が前稿で扱った地理誌や全国規模の古地図以外にも，風水的な地形認識の方法が表れるものとして，全国規模ではなく，一定の地域を描いた絵地図の存在があげられる。これは地理誌などに記された文章には表れない地形認識の形態が，地図に描かれることによって表れるという特性がある。このような地図を資料として用いることで，当時の地図を描いた主体による，風水を用いた地形認識を具体的な形態で捉えることが可能になると思われる。また上に示した朝鮮時代の風水知識の広まりについても，初期には王室関係者や僧侶，士大夫階層のみがそのような知識をもっておりそれが次第に民間に広まったという見解が一般的であるが[4]，それが具体的にどのような知識であったのかは明らかになっていない。このことについても，絵地図を用いた分析でその一端を明らかにすることができるものと思われる。

そこで，本研究は，朝鮮時代末期に作成された郡縣図の山川の表現方法にあらわれる風水地理的な地形の認識について考察することで，その特性を明らかにし，当時の地形認識のありかたの一側面について検討することを目的とする。具体的には，風水的な知識が広まったとされる李朝後期・末期に作成された邑誌のうち，1871年前後に作成された邑誌に付属する全ての郡縣図の風水地理的な地形表現について，風水地理説の方法や，近代の地形図と対比するなどして，その表現の特性を明らかにする。また，それを通して郡縣図に見られる風水的表現の起源や，その表現の背景についても考察を加える。

II．郡縣図の特性と邑の空間構成

(1) 郡縣図の作成時期とその特性

郡縣図は「郡縣地図」，「邑地図」などとも呼ばれ，朝鮮時代の地方行政単位である郡，縣，府，牧などの領域内の自然環境，街路，官衙（役所）をはじめとした行政に関わる施設の位置などの情報が描かれた絵地図である。現存する郡縣図は18世紀以降のものがほとんどであるが，それ以前にも作成されていた。19世紀に入ると，郡縣図は利用主体の多様化，技法の発達などにともなって量的に増加し，現存するものもその時期のものが最も多い。また18世紀中葉に編纂された地誌である『輿地図書』は，朝鮮半島全域の各行政単位ごとの地誌を集成する形式で作られたものであるが，この時に各行政単位ごとの地誌に郡縣図が添付された。それ以降，朝鮮時代の行政単位ごとの地誌である「邑誌」に付属するものが多くなった[5]。そのため邑誌は「図誌」とも呼ばれるように，基本的には「図（地図）」と「誌（文章）」で構成されることが基本とされ，郡縣図はその重要な一部分を成している[6]。

郡縣図は作成・編纂の方法などによっていくつかの類型に分類できる。まず，どのような方式で編纂され，現在に伝えられてきているかという点に着目すると，ある郡のみで作成された単独郡縣図，郡縣図を集成した郡縣地図集，上に述べた「邑誌」のような地誌に添付された郡縣地図の大きく三つに分類できる。さらに刊行の方法に着目すると筆で描かれた絵画式，木版に彫り印刷された木版式に分類でき，また地図の技法に着目すると，基準となる方眼を用いて位置関係を明確にして作成される経緯線表式と，方眼を用いない非経緯線表式に分類される[7]。本稿で扱う郡縣図は，上記の分類によれば地誌に添付された地図であり，多くのものが絵画式・非経緯線表式の類型に入るものである。

これらの郡縣図がどのような主体によって描かれたかという点についてはまだ明確でない点が多いものの，朝鮮王朝によって編纂されたものについては，各郡の地方官である守令が中心になって作成されたものであると考えられている。楊普景は，1630年に作成された慶尚道善山都護府の邑誌である『一善志』の冒頭にある，1477年に府使（守令）の金宗直の在任時に作られた郡縣図，「善山地図」に関する記載を引用し，守令が地域の統治と行政の便宜のため，画工に命じて領域内の河川，村，院・駅などを描かせ，人口や耕地についての情報もそこに記入させた例を示している[8]。おそらく郡縣図はこのような方法で作成されたものが多かったのではないかと思われる。

本稿で扱う郡縣図が添付された邑誌は朝鮮時代の地方行政単位ごとの地誌を記したものであり，行政単位ごとに建置沿革(歴史)，山川（自然環境)，官職（地方官の職名と人数)，戸口（人口)，風俗，物産，姓氏（居住する氏族)，人物(科挙及第者など著名な出身者）などの項目が列挙されている。邑誌という呼称はこのようなスタイルをとる朝鮮時代の地誌書を指す。邑誌には一つの道ごとに編纂された「道誌」と，一つの行政単位で単独に作成された「郡縣誌」がある。邑誌は19世紀に入って頻繁に全国的に集成されるようになり，1832年，1871年，1895年，1899年などのものが共時的に当時の状況を知ることができるために歴史資料として重要視されている[9]。この時期の邑誌には，自然環境を記した山川条に風水的な用語が多用されている。一般的に風水的知識は朝鮮時代初期には中央の一部支配層・知識人の知識であったものが次第に拡散したとされているが，本稿で扱う1871年邑誌のなかで，領域内の自然環境について記された「山川条」に用いられた風水用語をそれ以前の地誌と比較してもその傾向が見て取れる。

(2) 邑集落の構成要素

邑誌に記載される当時の地方行政単位は，総称して「郡」あるいは「邑」と呼ばれることがあり，そのために「邑」誌と呼ばれるのであるが，その領域の中で官衙（役所）の置かれた中心集落もまた邑と呼ばれることがあった。そのため，その中心集落は区別されて「邑集落」とも呼ばれる。邑誌やそれに付属する郡縣図に記される内容は，この邑集落についての内容が非常に多い。朝鮮時代には約330個ほどの地方行政単位が置かれ，その重要性と規模によって府，牧，大都護府，都護府，郡，縣にランク付けされていた。したがって，この邑集落はその地方行政単位の数だけ存在していた。

邑集落には，当時の行政の拠点であったために，朝鮮王朝が設置した施設が見られることがその特徴となっている。そのため官衙と呼ばれる役所があり，それはいくつかの建物に分けられるが，まず，その地域を管轄する官吏である守令が執務する東軒があり，これは官衙の中心的な建物であった。東軒は守令が執務を行う外東軒と，日常起居する内東軒に分けられる。その他に守令以外の官吏が執務する吏庁，在地勢力による守令の諮問機関

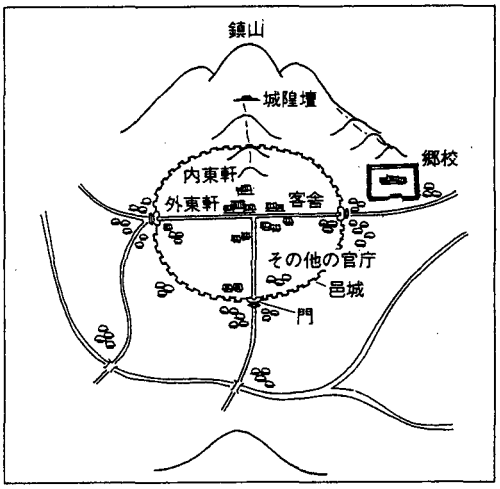

図1　朝鮮（李朝）時代の邑集落の空間構成
(李相昧，1983，196頁を一部修正)

として郷庁があり，これらの３つで官衙が構成される。また他地域から官員が来た場合に宿泊する客舎とよばれる建物も存在した。図１に示すようにこの官衙が邑集落の中心に配置され，そこを中心として周囲に城郭が築造される例も多かった。郷校は，普通邑集落から多少離れた位置にあり，郡内の子弟の儒学教育機関であった。また社稷壇，城隍壇をはじめとした各種の祭祀施設なども必ず設けられ，それらはやはり集落から多少離れた場所に配置された[10]。郡縣図はこの邑集落を中心に描かれる場合が多く，上に示した役所や公的な施設は特に重点的に描かれることが多い。

III．郡縣図の描写にみる風水地理的認識

朝鮮時代後期の郡縣図には上記のようにさまざまな情報が描かれているが，そのなかでも郡や邑集落の周囲の山や河川の表現方法をみると，風水的な知識をもって描かれたと思われるものがみられる。本稿ではそれらの中でも，同時期に作成され，しかも全巻が揃っており，利用しやすい1871年の邑誌に付属する郡縣図を扱う[11]。この邑誌は，当時欧米列強の侵入に備え国内整備をするための資料として，興宣大院君[12]の命により編纂されたものであり，郡縣図は全327郡のうち280郡に添付されている（表１）。

この280の郡縣図について，朝鮮風水の基本的な風水書である『錦囊経』，それを含めて朝鮮風水の理論を整理した崔昌祚や村山の著書[13]を参考にしつつ，風水師が墓所を選定する際に作成した風水図[14]，さらには李朝後期から末期にかけて編纂された地図である『海東地図』[15]，『大東輿地図』[16]との比較を行い，また邑誌本文の記述ともつきあわせてその全てを検討すると，風水的な表現方法であると考えられる点は大きく二つあげることができる。

第一に邑集落全体や，官衙，郷校，客舎など重要な施設への背後の山からのつながりが記されている点である。これは朝鮮半島の風水で重要視され，生気を供給すると考えられる，集落の背後にある主山（鎮山）や，さらに遠くにある祖山からのつながりを描いているものと考えられる。すなわち邑集落や官衙に生気が供給されているという表現である。

第二に邑集落や重要な施設の周囲が何重にも山で囲まれている点である。これは，上に述べた，生気が風で吹き散らされないように集落の周囲は山で囲まれていなければならないという認識が，風水説で見られることが反映しているものと考えられる。

またそれ以外に，図の表現ではないものの，風水用語が直接図中に記されているものなどが見られた。以下それらの点を中心に典型的な事例をあげ，詳細に検討してゆくこととする。

表１　1871年編纂の邑誌に添付された郡縣図数

	邑誌のある郡縣の数	郡縣図の添付されたもの	郡縣図が付属する割合
京畿邑誌	37	36	97.3%
湖西邑誌（忠清道）	54	41	76.0
嶺南邑誌（慶尚道）	63	62	98.4
湖南邑誌（全羅道）	56	52	92.9
関東邑誌（江原道）	26	26	100.0
海西邑誌（黄海道）	23	22	95.6
北関邑誌（咸鏡道）	24	22	91.6
関西邑誌（平安道）	44	19	43.2
計	327	280	85.6

表2　郡縣図にみる風水地理的な地形表現

	郡縣図数	山のつながりを強調	邑や官衙を山が囲む	用水用語が記入される
京畿邑誌	36	4	6	1
湖西邑誌（忠清道）	41	11	6	1
嶺南邑誌（慶尚道）	62	5	9	3
湖南邑誌（全羅道）	52	8	5	2
関東邑誌（江原道）	26	8	4	1
海西邑誌（黄海道）	22	1	4	4
北関邑誌（咸鏡道）	22	3	8	0
関西邑誌（平安道）	19	1	5	1
計	280	41	47	13

表2はそのような表現がみられる郡縣図の道別の数を示したものであるが，全体の30％ほどの郡縣図に風水的な表現方法が見て取れる[17]。したがって，割合としては多くないものの，風水的な表現が見られる郡縣図は決して特異な例ではないことが理解できる。

筆者は前稿においてこれらの郡縣図が付属していた邑誌の本文中の記載に見られる風水的な表現について言及したが，風水的な表現が記された邑誌の割合が約6割であったことに比べ，郡縣図にみる風水的表現方法は全体的に見て少ないといえる[18]。またより詳細に邑誌の記述と郡縣図の表現に見られる風水的な認識について検討すると，必ずしもその相関関係は認め難い。すなわち郡縣図できわめて明瞭に風水的な表現がなされていても，それが付属している邑誌の文章にはそれほど風水的な認識方法は現われない例が多く認められる。たとえば後述する慶尚道永川，忠清道恩津，石城，魯城の郡縣図にはかなり明瞭に風水的な表現が見て取れるが，邑誌の本文には多彩な風水的表現が表れるわけではない。

(1)　「脈のつながり」

朝鮮半島の風水地理説では中国の崑崙山より発した，「気」の流れる「脈」が白頭山を経て各地の山々へ必ずつながっているという認識があり，さまざまな歴史的資料にも表れると同時に，朝鮮時代の地図にも表現される。例えば1714年に李重煥の記した地理書である『択里誌』などでは，白頭山からの脈（尾根線・稜線）のつながりについて記され，邑誌などにも，近くの名山からのつながりを記しながら一つの郡の領域にある山や河川を記述する例がある[19]。また1861年に金正浩によって作成された朝鮮半島全図である『大東輿地図』などでは，白頭山からの脈（稜線・尾根線）が全てつなげられて描かれている。

このような地形の認識を，朝鮮半島の風水思想を整理した崔昌祚は，「看龍法」，すなわち山（風水では龍と表現する）を看（み）る方法として整理し，龍脈（尾根線）の中を生気が流れているという認識のもと，龍脈の善し悪しを，祖山から家や墓を作るべき吉地である「穴」までを調べるものであると述べている[20]。また日本統治期に朝鮮半島の風水についてまとめた村山は，ほぼ同内容のものをやはり「看龍法」として示している[21]。

郡縣図では，この認識は，近くの名山，邑の主山（鎮山），背後の山から邑集落や官衙など邑集落の中心となる建物へのつながりが描かれる表現に反映されているものと考えられる。

この典型的な事例である，慶尚道永川郡（現在の慶尚北道永川市）の邑誌「永川郡誌」に添付された「永川郡之地図」（図2）をみる

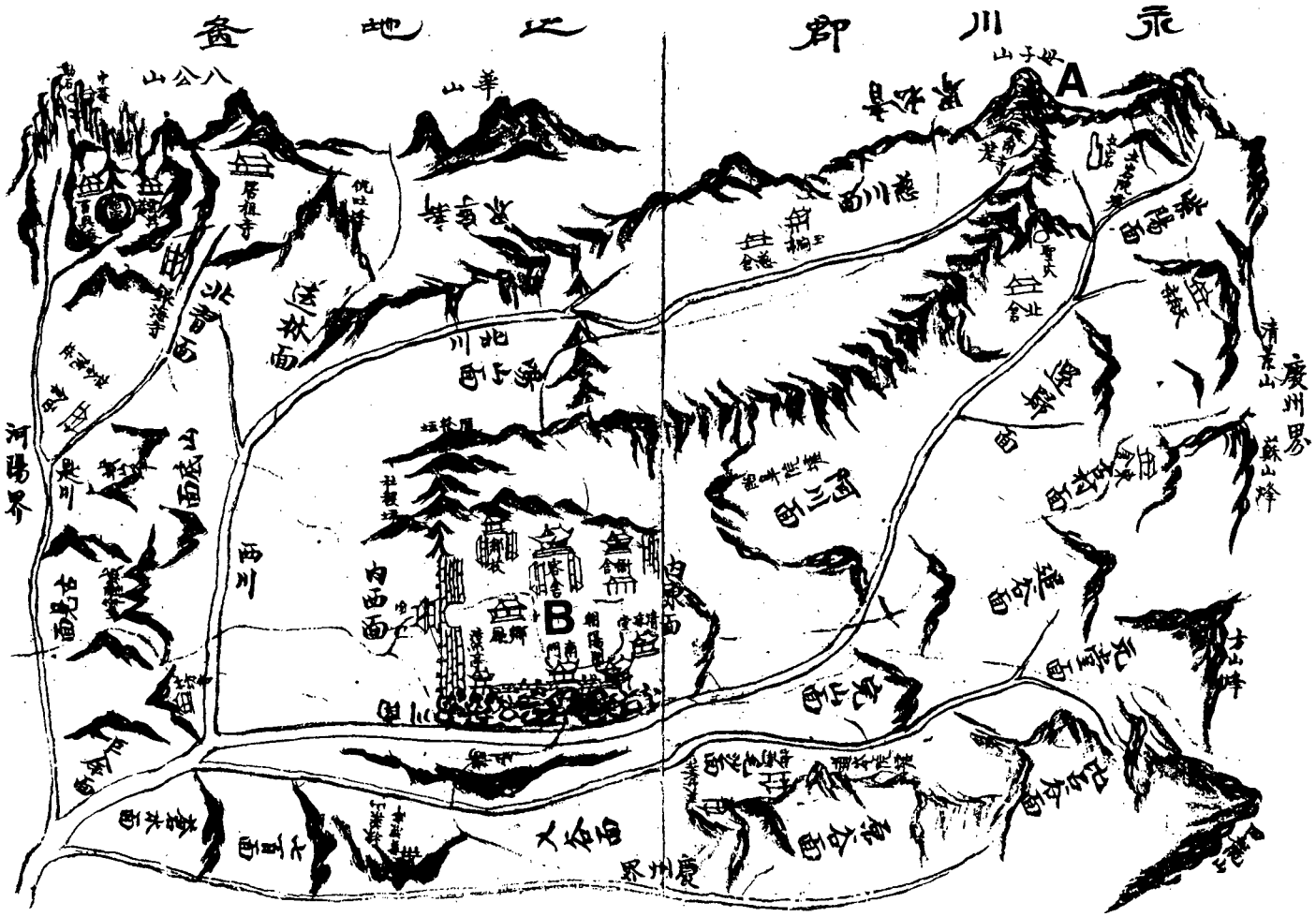

図２　永川郡郡縣図「永川郡之地図」　（韓国学文献研究所『邑誌　二〇　慶尚道④』，亜細亜文化社，1086 頁より）

と，邑誌の本文で官衙から北九十里[22]というかなり遠距離にあり，鎮山である[23]母子山(図中A）から，衙舎（官衙），客舎，郷校があり，城郭をもつ図中央の邑集落（図中B）まで山がつなげられていることが分かる。これはやはり上記の看龍法に代表されるような認識が地図に具体的な形として表現されたものであると考えられる。同様の表現は，忠清道恩津，定山，慶尚道順興都護府などをはじめとした41郡の郡縣図に表れる。

このような表現は実際の地形と対比するとかなり誇張されたものなのであろうか。次に，永川郡の事例と同様に山のつながりが象徴的に表されている，忠清道恩津縣（現在の忠清南道論山郡恩津面）の郡縣図を日本統治時代の5万分の1地形図と対比することで，実際の地形に対してどのような表現がなされていたのかについて検討する。

図3の恩津縣の郡縣図をみると，図中Cに

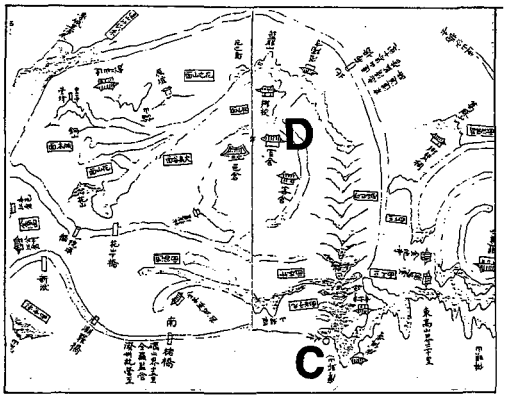

図3　恩津縣郡縣図
（韓国学文献研究所『邑誌　八　忠清道②』，亜細亜文化社，709頁）

示した摩耶山は恩津縣の官衙から南二十四里にある鎮山であるとされるが，やはりそこから官舎（官衙・図中D）の背後に山のつながりが記されている。これを陸地測量部作成の5万分の1地形図上に記すと図4のようになる。図中に尾根線を実線で示したが，これを見ると摩耶山から官衙に至る尾根線のみが描かれ，それ以外のものは省かれているが，尾

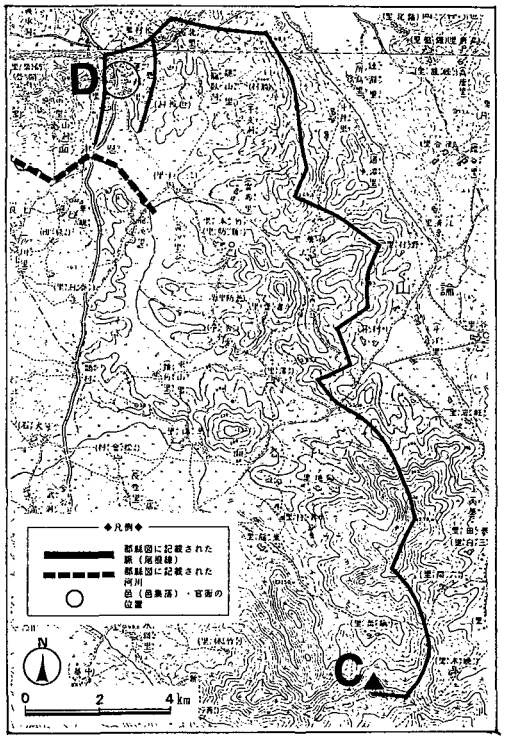

図4　地形図にみる郡縣図の表現（恩津縣）
（陸地測量部　大正十一年修正「論山」，「江景」を使用）

根線のつながり自体はかなり正確に表現されていることが理解できる。また，このような表現方法には，邑集落や官衙の背後の山がどこからつながっているのかを明示しようとする意図が感じられる。

(2)　「相々環抱」

朝鮮半島の風水地理説では，上記の脈を流れてきた「気」が漏れないように，気がわき出る穴の周囲が幾重にも山で囲まれている地形が理想的であるとする。これは各種の風水図や，前記の村山智順の著書にある「山局之図」[24]などにも示されている（図5参照）。

この考え方を，上述の崔昌祚や村山は，郭璞の『錦囊経』などの「生気というものは風に乗れば散らばってしまう（経曰　気乗風則散）」ため風を防ぐことを重要視するという記述を引き，「蔵風法」として，風水地理説の一つの方法として位置づけている。すなわち，

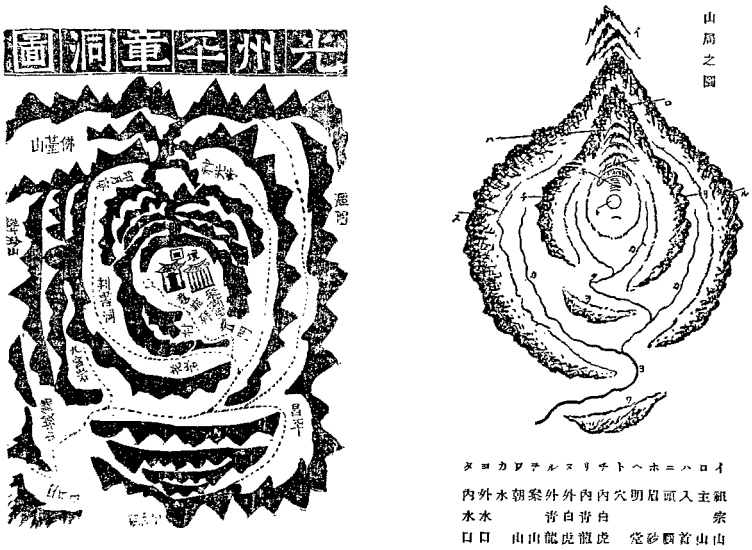

図5　風水図と山局之図の対比
（左：光州平章洞図，19世紀後半，李燦編『韓国の古地図』（韓文）313頁より，
右：山局之図，村山智順『朝鮮の風水』17頁より）

これは風にさらされれば吹き散らされて無くなってしまう生気を守るために，前記の看龍法で探すことのできた穴の周囲を囲む山々の善し悪しを見る方法である。具体的には青龍，白虎，案山・朝山などと呼ばれる，穴の周囲を囲むべき山々を判断する方法である。これらの山々の理想的な形態は穴の周りを何重にも囲むものであり，そのような山の形態を「相々環抱」と呼ぶこともある。

郡縣図にも邑全体や官衙，郷校，客舎などの周囲を幾重にも囲むような形で山が描かれる例があるが，これは風水図などにあらわれる蔵風法の考え方が表現されたものと考えられる。

この事例として，まず図6に示した忠清道石城郡（現在の忠清南道扶余郡石城面）の邑誌である「石城郡誌」に添付された「石城地図」を検討すると，背後の山から延びた山のつながりが衙舎（官衙），客舎など（図E）の周囲を二重に囲むように描かれている。これはやはり上記の蔵風法でみた，風水での理想的な形態が表現されているものと思われる。また，これは図5に示した風水図と類似した表現方法であるとも言える。このような表現は，これ以外にも京畿道砥平縣，加平縣，衿川縣，忠清道魯城縣などをはじめとした47郡の郡縣図にあらわれる。

次に，このような表現を地形図と比較すると，図7，8に示すようになる。図7に示した忠清道魯城縣（現在の忠清南道論山郡魯城面）の邑誌に添付された郡縣図を検討すると，邑誌の本文で官衙の北五里にある鎮山として記されている魯城山[25]（図中F）から山が官舎（官衙），客舎，邑倉のある邑集落（図中G）へと延びているが，その山のつながりから支脈が分かれ，邑集落を三重に山が囲む形で描かれている。図7のこの官衙の周囲を囲む山々など，郡縣図に示された地形を，郷校などの他の施設との位置関係から地形図上で表現したものが図8である。これをみると，周囲の山々は実際に存在するものの，かなり誇張されて描かれていることが理解できる。すなわち周囲の低い山を大きく，あるいはかなり形を変えてシンボリックに表現している。

この山々は実際にはどのように見えるのであろうか。図9上段は現在魯城縣の旧邑集落

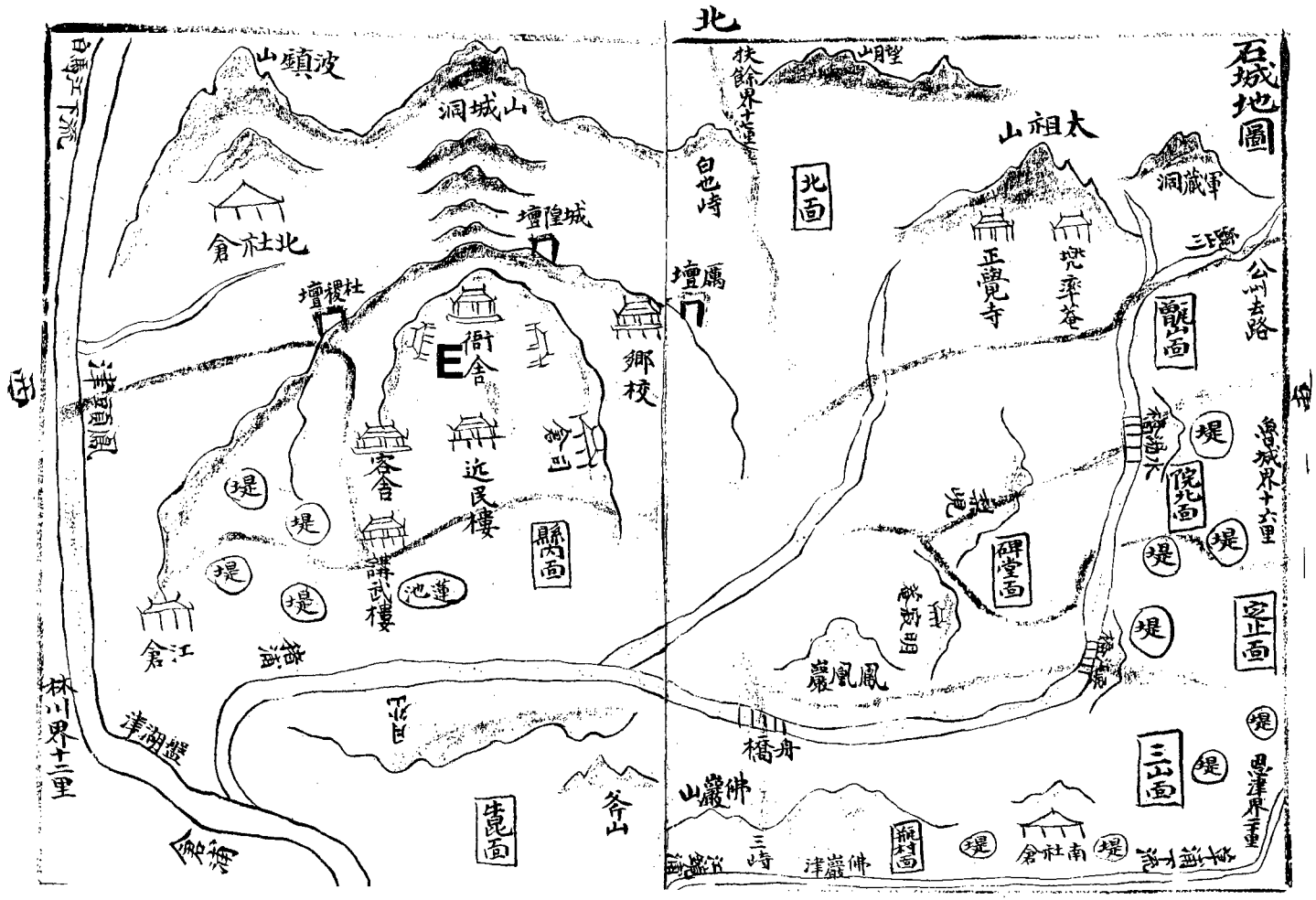

図 6　石城郡郡縣図「石城地図」　（韓国学文献学研究所『邑誌　八　忠清道②』，亜細亜文化社，702 頁より）

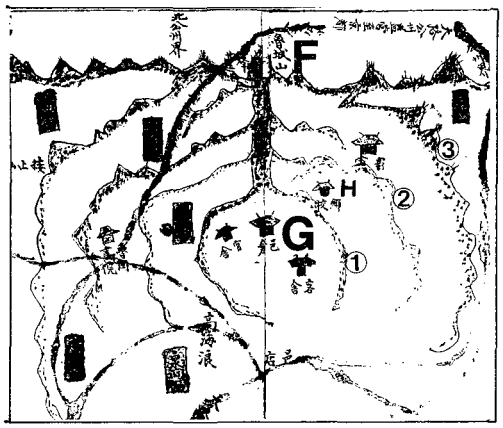

図７　魯城縣郡縣図
（韓国学文献研究所『邑誌　八　忠清道②』，亜細亜文化社，702頁）

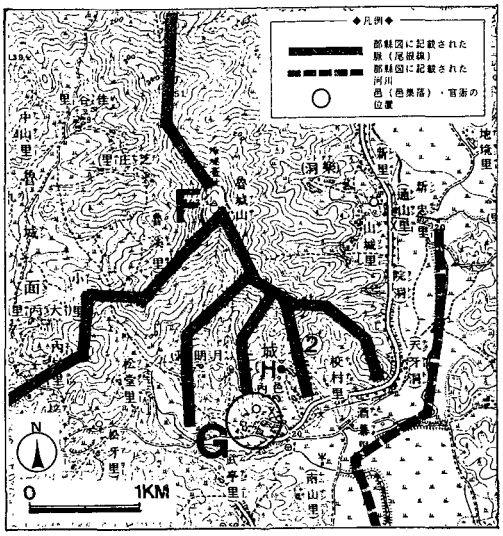

図８　地形図にみる郡縣図の表現（魯城郡）
（陸地測量部　大正十二年修正「論山」を使用）

の写真であり，下段はそれを図化し，郡縣図と現地調査をもとにして官衙など重要な建築物の位置を記したものである。図中Ｇは図７の郡縣図にある衙舎の位置である。したがってその周囲に見える山々が郡縣図に描かれた山である。これを見ても実際見える形よりも，郡縣図の山々の姿は誇張されたものである。

図７で衙舎を囲む一番内側の山（図中①）は，図９の写真や現地調査においても確認できず，より風水の理想の形に近づけようとする意図で描かれた可能性がある。ただし，図７の②，③の尾根線は，図８の地形図と対比すると，形態はかなり模式化されているものの，実際に存在することが分かる。例えば，

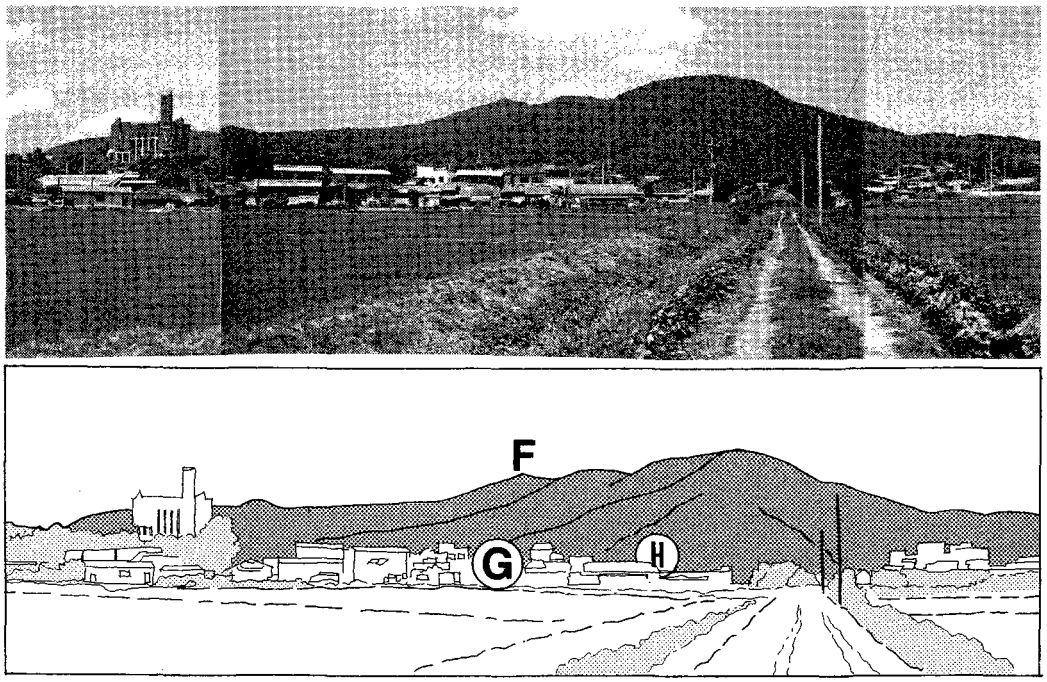

図９　現在の忠清南道論山郡魯城面魯城（旧魯城縣邑集落・上段）と魯城山・官衙・郷校の位置（図７，８に対応・下段）

図中②の尾根線は，図7の郡縣図中では内側に郷校がある（図中H）ことが分かるが，図8の地形図上でもその外側に尾根があることが理解でき，実際に存在していると考えられる。このことは，前節で述べた山のつながりの表現と同様，誇張されながらも尾根線についてはある程度正確に捉えられていることを示している。

以上で述べた表現方法には，郡の中心である邑集落や，国家によって造営された官衙が，何重にも山に囲まれた風水的に良い場所に立地しているということを表現しようとする意図が感じられる。

(3) 郡縣図中に記入された風水用語

墓の位置などを示した風水図の描写と類似した表現で山が描かれるもの，あるいは図中に風水の用語が記されているものなどがある。たとえば全羅道宝城郡の郡縣図[26]では，図中で鎮山である徳山を経て邑集落に向けて延びる山のつながりに「邑龍主脉」と記され，風水的に重要な山のつながりについて表示している。その他に風水用語の図中への記入が見られる郡縣図は，慶尚道豊基郡など13郡に見られる。

上記の(1)，(2)，(3)のような風水的な表現が1871年邑誌に添付された郡縣図にあらわれる。これらの表現は一つの郡縣図に複数示される例もある。また逆に全く風水的な表現のない郡縣図もかなり見ることができ，それらには，とくに山，川，事物が散在するという特徴が見られる。また(1)，(2)の表現には，邑集落の，あるいは官衙の風水が良好であることを強調しようとする意図が感じられる。

Ⅳ. むすび

本稿では風水的な知識が広まった朝鮮時代末期に作成された郡縣図の中から，共時的に把握しやすい1871年邑誌に付属する郡縣図を対象として，そこにあらわれる風水的な表現方法について，その特性を明らかにした。最後にその特性について整理した上で，当時の風水知識のあり方と，郡縣図にそのような表現がなされた背景などについて考察を加え，また本稿でふれ得なかった課題について示しておきたい。

本稿で得られた郡縣図の風水的表現の特性としては，第一に背後の山，特に邑の主山などから邑や官衙へのつながりをある程度正確にとらえ表現するという点があげられる。これは生気の流れる山のつながりを重要視する風水地理説の看龍法の地形の見かたが反映されたものであると考えられる。このような表現方法は，1750～1770年代頃に編纂されたと思われる郡縣地図集『海東地図』や，1861年に作成された『大東輿地図』にあらわれており，また朝鮮半島全体の山のつながりについてはすでに18世紀の初期には当時作成された朝鮮全図に表現されていた。そのためそれらの地図表現の影響があったとも考えられる。

第二に，邑の周囲の山を何重にも取り囲むように描くという点があげられる。その際に大きさ，形などを風水的な理想の形にあわせ実際よりも誇張する傾向がある。これは風水地理説では蔵風法としてまとめられる，風水的にみて良い場所である穴を山が幾重にも取り囲んでいる地形を理想とする考え方が反映したものと思われる。このような表現方法は墓地などを示すために描かれる風水図などの影響があることが推測される。それ以外にも直接図中に風水用語が記され，ある山が風水的に見てどのように考えられているかが示されている例もあった。

このような郡縣図にみる風水的な地形認識は，地図の作成主体に形として認識されていたものであると考えられる。前記のように，これらの郡縣図の作成主体は地方官である守令や，守令に命じられた画工であると推測されるため，かれらに，あるいはどちらかにそのような認識があったものと考えられる。た

だし，山のつながりに関する認識はそれ以前に作成された朝鮮全図や『海東地図』に代表される郡縣地図集にあらわれており，また集落を囲む山の表現は当時の風水図などにあらわれており，一種の地図の表現技法として定着していたものであるかもしれない。

このような山のつながりと，吉地を山で何重にも囲むという形態をとる風水的な地形認識は，朝鮮半島に限らず風水の形法的な側面をよく表している。とりわけ，筆者が前稿で扱った『大東輿地図』に代表される山のつながりに対するこだわりは，特に形法の考え方の中核をなすものであり，それが郡縣図のように小地域の，しかも墓の位置などを示した風水図とは作成目的の異なる絵地図にも表れていることは，朝鮮風水の形法の強さを如実に表しているとも言えよう。また東アジアの風水を扱う際には理法ばかりでなく，このような形法を主とする風水の存在を念頭に置いておく必要があろう[27]。

また本稿で扱った郡縣図の表現を通じて，一貫してみられるのは，郡の中心である邑集落や官衙などの立地位置が風水的に良い場所であると表現しようとする意図である。すなわち鎮山から脈がつながっており，山に幾重にも囲まれた吉地であり，気が供給され貯められる場所に邑集落や官衙が立地しているということを示そうとする意図である。この官衙を風水的に良い場所であると見立てる意識については，近世琉球において記された『北木山風水記』の解読を行った町田・都築が指摘している[28]。それによると，風水記において，何よりも先に番所の風水見分が行われるのは，近世琉球の地方ごとの役所である「番所」は，島の根本となる場所であり，島の秩序，ひいては豊饒の根源となるので，番所の風水の善し悪しがその集落や島の秩序や運命に関わってくるという認識である。言い換えれば，番所の風水的環境が良ければその地域全体が良くなるという考え方があるものと思われる。このような考え方が朝鮮半島の場合にも郡縣図の表現としてあらわれているとの推測が可能であろう。すなわち，官衙や官衙のある邑集落が良好な風水的環境をもっていることを示し，その地域全体が良好な環境をもつことを祈念するということである。

最後に，本稿ではふれ得なかった課題について述べておく。まず第一に，ここで扱った風水的な地形認識は基本的に郡縣図に関わることができる守令，画工といった特殊な階層の認識であり，当時の風水知識をすべて確かめたものではない。したがって一般の人々の風水知識をも代表するものではない。次に郡縣図がこのような表現をもって描かれる背景については，最後に琉球の例を引いて筆者なりの推測を述べたが充分に論じられなかった。またそれに関連して，そのような表現がどのような地図の影響を受け形成されたかという点については，風水図，『海東地図』，『大東輿地図』との関連について示唆するにとどまった。これらの点については，さらなる検討が必要である。

（中部大学国際関係学部）

〔注〕

1）形法と理法の相違点や理論形成の時期などについては，中国の風水思想の歴史的展開について述べられた以下の文献に詳しい。
デ・ホロート（牧尾良海訳）（1986）：『中国の風水思想――古代地相術のバラード――』，第一書房。
何曉昕（三浦国雄監訳・宮崎順子訳）（1995）：『風水探源』，人文書院，292頁。

2）渋谷鎮明（1995）：朝鮮半島における風水地理説を用いた地形認識，歴史地理学，37－3，1～15頁。

3）堀込憲二（1990）：風水思想と都市の構造，思想，1990年12月号，73～99頁。

4）李夢日（1991）：『韓国風水思想史研究』（韓文），日駐社，268～269頁。

5）楊普景（1996）：郡縣地図の発達と『海東地図』（韓文），（ソウル大学校奎章閣編『海東地図　解

説・索引』)，60～73頁。

6）楊普景（1987)：朝鮮時代邑誌の性格と地理的認識に関する研究(韓文)，ソウル大学校博士学位論文，174頁。

7）前掲5)，64～67頁。

8）前掲5)，61～62頁。

9）ただし，邑誌は郡縣を単位としているため，それより下位の面，里といったより小さなスケールの情報が充分でない。また下記の文献でも指摘されているように，邑誌に付属している郡縣図においても同様である。
山田正浩（1996)：李朝時代（朝鮮）の地方誌――「邑誌」について――，愛知教育大学地理学報告，83，1～17頁。

10）李相様(1983)：朝鮮中期の邑城に関する研究（韓文)，ソウル大学校土木工学科都市工学専攻修士論文，196頁。

11）資料はソウル大学歴史資料室「奎章閣」所蔵本の影印本（亜細亜文化社刊）を利用した。

12）1820－1898，李朝末期の政治家，李昰応をさす。次男である高宗（在位1863－1907）の即位に伴い摂政となり実権をふるった。

13）村山智順（1931)：『朝鮮の風水』，朝鮮総督府。
崔昌祚(1984)：『韓国の風水思想』（韓文)，民音社。

14）風水図は，李燦編（1991)：『韓国の古地図』（韓文)，汎友社刊に掲載のものを用いた。

15）1750～70年頃に編纂された郡縣地図集。分析にはソウル大学校奎章閣編の『海東地図上・下』を用いた。

16）1861年に金正浩によって編集・作成された朝鮮全土の地図。

17）質的な情報を数量的に示すのには問題があるが，風水的な表現がどのくらい行われたかについて示すために表に示した。

18）前掲2)，6頁。

19）前掲2)，8頁。

20）前掲13)，崔昌祚，33頁。

21）前掲13)，村山智順，33～49頁。

22）1里が約400mであるので，約36kmほどである。

23）「在郡北九十里来自青松普賢山為鎮山……」とある。韓国文献学研究所『邑誌　二〇　慶尚道④』，亜細亜文化社，1087頁。

24）三浦国雄は下記の文献において，従来の風水関係の論文で風水の理想の地形として引用されることの多い「山局図」について，それ以前に描かれた風水図には山局之図のように女性器を直接的に連想させるような図が見られず，村山の解釈の入り込んだ図なのではないかという疑義を表明している。ただし図5での風水図との対比を見ると，表現の方法は非常に似ていることが理解でき，村山の山局之図は風水図に見られるような表現を模式化したものであるとも考えられる。
渡邊欣雄・三浦国雄編（1994)：『環中国海の民俗と文化4　風水論集』，凱風社，34頁。

25）「在縣北五里鎮山……」とある。
韓国学文献研究所編(1985)：『邑誌　八　忠清道②』，亜細亜文化社，703頁。

26）韓国学文献研究所編（1983)：『邑誌　四　全羅道①』，亜細亜文化社，540頁。

27）風水の形法的側面を日本の研究に適用した例としては，平安京の龍脈について言及した黄永融の論文などがあげられる。日本の古代旧都の研究にどのように風水の考え方を導入するかについてはまだ考慮の余地があるが，龍脈などの形法的な視角と日没方位などの理法的な視角を合わせもつことによって新たな視点を提供する良い事例であり，評価されるべきであろう。
黄永融(1993)：風水思想における原則性からみた平安京を中心とする日本古代宮都計画の分析研究，京都府立大学生活科学研究科修士論文。

28）町田宗博・都築晶子（1993)：「風水の村」序論――『北木山風水記』について――，琉球大学文学部紀要　史学・地理学篇，36号，109頁。

〔付記〕
本稿は1996年度歴史地理学会大会において口頭発表した内容に加筆修正したものである。また本稿の作成にあたっては平成8年度文部省科学研究費補助金・課題番号07455248「李朝末期『大東輿地図』にあらわれる環境観・自然観の研究」（代表者齊木崇人）の一部を利用した。
なお，郡縣図に関する資料収集にあたってはソウル大学校奎章閣特別研究員楊普景氏に多大なご配慮を戴いた。記して感謝いたします。

Landform Cognition in *Pung-su* Thought seen in Korean *Gun-hyun-do* (County Maps)

Shizuaki SHIBUYA

Pung-su (*Feng-shui*, 風水) is a kind of East Asian traditional geographical thought. There is a two kind of method in *pung-su* thought. These are "*Keihou* (形法)" as a way of looking at landform and "*Rihou* (理法)" as a way of looking at orientation. *Keihou* is used by Korean *pung-su* thought very well. The purpose of Korean *pung-su* is to seek human felicity by the help of *ji-ryuk* (地力), a composite of ground forces. It is thought that ground forces give good luck to people who select favorable sites for their buildings, settlements or ancester's burial grounds. Moreover, Korean pung-su had a important role in landform cognition in Chosun era.

Gun-hyun-do (county maps) were made by every counties (*Gun*, *Hyun*) in late Chosun era and represent many geographical information like landform, settlements, road, and public facilities. These *Gun-hyun-do* were mostly appended to *Eup-chi* (geographical records). This maps were made by painter on the instructions of *su-ryung*, a public official of county in Chosun era. The expression of landform in *Gun-hyun-do* is influenced by *pung-su* thought. So we can see landform cognition influenced by *pung-su* thought in there maps clearly.

The purpose of this paper is to clarify characters of landform cognition influenced by *pung-su* thought in Gun-hyun-do. 280 *Gun-hynu-do* appended to *Eup-chi* compiled in 1871 are utilized as research materials. As a result, we can find two main charactaristics of expression as follows:

1. 41 maps adopted a special method of expression that gives weight to connection of ridge lines. This kind of expression is similar to a content of *Kanryong bop* (看龍法), one of the *pung-su* method. The method is a way of looking at ridge lines by cognition that *Saeng-gi* (生気), flow of *ji-ryuk*, flows on ridge lines. This method reflected in the maps clearly draw ridge line from *jin-san* (鎮山), important mountain in *pung-su*, to public office in the county. This method of expression can be traced to complete maps of Korea like Daedong-yojido (大東輿地図), Chongu-do (青丘図), Haedong-jido(海東地図).

2. In 47 maps, important felicities like public office is surrounded double or triple by mountains. This kind of expression is similar to a content of *Chanpung-bop* (蔵風法), one of the *pung-su* method. The method emphasizes ideal landform that important point or felicity is surrounded by mountains in order to save *seang-gi*. This ideal landform is reflected in expression of these maps. This kind of expression is very similar to *pung-su-do* (風水図) that shows a favorable site for burial grounds.

This way of expression used in *gun-hyun-do* shows landform cognition influenced by *pung-su* as clear figure. And this kind of landform cognition is held by Korean governing class people like *su-ryung* (守令) in late Chosun era, and also show characteristics of Korean *pung-su* marked by *Keihou*.